

登山家の遭難とは縁起でもないと思われるかもしれないが、山歩きを始めるとともに山岳関連図書を読むなどするなかで有名登山家の遭難死が如何に多いことかを知った。先に加藤文太郎と植村直己の故郷を訪問した随想(注1)を書いたのも2人の遭難死について若干なりとも考察したいとの思いがあったからだ。

加藤と植村は私と同郷の但馬の産である。加藤は1936年1月槍ヶ岳北鎌尾根に挑むが猛吹雪で遭難死した。植村は1984年世界初のマッキンリー冬季単独登頂を極めた翌日に消息不明になった。2人は享年31才、43才の若さで冥界に旅立った。



2人の遭難者の内、加藤の遭難死に特に関心を掻き立てられた。冬山単独登攀の名手が単独でなくパートナーとザイルを結んだ山行で何故に遭難死したのか、単独行であれば死ぬことはなかったかもしれないとの見方はどうなのか、という誰もが持つ単純な疑問と文太郎の人間像への関心であった。

まずは文太郎の生い立ち、履歴に踏み行ってみたい。文太郎は明治38年3月(1905年)、山陰地方(但馬国)の兵庫県美方郡浜坂町浜坂の漁師の家の四男として生を受けた。子供の頃水泳、魚採りが好きで、中でも海老を取るのが上手だった。近くの藪山を走り廻って遊んだ。性格は優しく意志の強い子で、勉強も良くでき理数系に優

れていたという。大正8年(1919年)に尋常高等小学校卒業と同時に神戸の三菱内燃機製作所に製図修習生として14才で入社した。勤務しつつ、兵庫県立工業学校夜間部を卒業(皆勤、優等賞受賞)、その後も21才まで夜は神戸工業高等専修学校で勉学し、昭和2年(1927年)に技手、就職して15年後の昭和9年(1934年)に技術者の最高位技師に昇格した。

文太郎の入社当時、神戸では在住外国人の影響を受け、六甲山へのハイキング、日曜登山などの山歩きが流行っていた。16才の時(大正10年、1921年)、会社の上司(遠山豊三郎)の教えで山々を歩き始め、昭和2年(1927年)に藤木九三(注2)が創設したR.C.C.(ロッククライミングクラブ)に加入した。勤務の傍ら、文太郎は兵庫県の国道・県道をリレー式で約400里歩いたり、浜坂の実家まで山伝いに帰ったりした。また須磨から宝塚までの往復約100キロを朝5時に出発して17時間で歩き通し、翌日には普通に仕事をした程に鍛錬した。体力、歩速は超弩級であった。

この頃の登山は案内人と荷物持ちを雇って多数で登る、大学山岳会や富裕層のスポーツだったが、文太郎は普段着に地下たび姿で好きな甘納豆を食料に単独行を始めた。大正14年(1925年)頃より本格的な登山を始め、大正15年夏の7月初めての北アルプス(槍など)11日間単独山行をした。昭和3年(1928年)2月但馬の氷ノ山で積雪期冬山単独行を始め、翌昭和4年1月に初の積雪期冬山アルプス単独行(八ヶ岳連峰赤岳など、7日間)を成功させた。これ以後、文太郎は毎年積雪期の冬山単独行を行った。昭和6年(1931年)には1月の厳冬期に10日間にわたる単独北アルプス縦走を成し遂げ、「単独登攀の加藤」、「不死身の加藤」と呼ばれた。

技師になった翌年、30才(昭和10年、1935年)で同郷の花子と見合い結婚し、同年11月に長女(登美子)を授かった。昭和11年1月に前年の暮れからの正月休みを利用して岳友の吉田富久(注3)とパーティーを組み槍ヶ岳北鎌尾根に挑戦して遭難死した。文太郎は結婚後初の正月を家族三人で祝うことなく他界した。



次に遭難死前後と遺骸発見の様子を記す。文太郎は昭和10年(1935年)12月29日、吉田富久は28日、各々神戸を出発した。文太郎は「遅くとも5日には帰る。帰る頃には登志子(登る志の子)の眼が見えるようになっているかな」と言い残して出立した。

12月31日=槍見温泉で吉田、大久保、濱が合流し、4人が集合。

昭和11年元旦=快晴、13時頃 槍平小屋着、19時頃 槍肩ノ小屋着。

2日=朝より吹雪、10時頃 文太郎、吉田の2人は北鎌尾根偵察のため槍の穂に向かい3時間ほど経て頂上を極めて小屋に帰着。

3日=午前中晴れ午後から猛吹雪、7時 吉田をリーダーとして大久保、濱の3名は槍へ向かう、文太郎は小屋で食事の準備、11時頃 3人帰着、昼食後文太郎と吉田は大久保、濱に直ちに槍平に降るように言い残し、自分ら2人は北鎌尾根に向かうと言って小屋を出立、その時文太郎は今日は間違いなく晴れだと言っていた、食糧は甘納豆、りんご2つ、チョコレート3枚で服装は簡単な防寒具だった由。

12時過ぎ大久保、濱の2人は槍平に降ろうと小屋を出たが、既に猛吹雪で途中から肩ノ小屋へ戻る、他の2人は戻らずビバークしていると考え心配しなかった由。

吹雪は4、5、6日と続く。

7日=吹雪が収まり、大久保、濱の2人は12時頃下山にかかり、14時頃槍平の手前で蒲田案内組合の大倉に会う、栃尾に降る人夫に文太郎、吉田遭難の第一報を神戸の「関西徒歩会」に打電を依頼。

捜索隊は1月12日(快晴)天井(ママ)沢側の雪庇の下の雪を掘った跡に鉛筆、甘納豆の缶やチョコの紙を発見、また付近に糞便を発見してビバークを確認、槍の穂に向かう足跡を追うと頂上の10m下方の岩の下でアイゼンの跡が消滅、この現場から判断して千丈沢側に墜落したものと推定し、その後も吹雪が続いたため17日に捜索を打ち切る。

文太郎の遺骸は4月26日天井沢を遡っていた松本高校生の木村、中島の2人によって発見された。現場は天井沢と千丈沢との出会いから上手約八丁の所、岩小屋付近の小溪流に浸って横たわっていた。そこより約200m上手で第3吊り橋の袂にピッケルが立ててあり、その下の雪中に吉田の遺体が埋もれていた。文太郎と吉田の二人が死の最後まで山の友情を保持し、慇懃として死についた模様を看取ることができる。現場の状況は整然としていた。2人の遺体は腐乱しており現場で茶毘に付された(遠山豊三郎の記より)。

新聞(5月1日付大阪毎日)は「国宝的山の猛者、槍で遭難、死体発見さる、去る1月来消息を絶った加藤ほか1名4月振にこの悲報」「全国の峻険を単独で征服、名だたる加藤氏」「哀しき逸話、同伴者と登山したのが皮肉・死の門出」などの見出しで報じた。

紙幅の関係で前半をここで一旦終了して、次号で単純な疑問につき書きたい。

(次回に続く)

(注1)随想 東京アルコウ会の会報 2018年2月号及び3月号に掲載

(注2)藤木九三 新聞記者、登山家、日本山岳会顧問、1928年日本初のロッククライミング
目的の山岳会 R.C.C 同人を発足させ、翌年日本初の岩登り理論書「岩登り術」を刊行

(注3)吉田富久 鉄道省鷹取工場鍛冶場職工、関西徒歩会所属、岩や氷の登攀に優れた、
享年 27

[参考資料]

「新編単独行」= 加藤文太郎著、ヤマケイ文庫(2010年11月刊)

「孤高」= 加藤文太郎記念図書館(平成25年刊)

パンフレット「加藤文太郎」= 加藤文太郎山の会(2011年3月刊)

「孤高の人」(上下)= 新田次郎著、新潮文庫(昭和48年2月刊)